

兵庫県カリキュラム・マネジメント実践事例

社会に開かれた教育課程で、信頼される学校づくりをめざす

「未来への道を切り拓く力」を育む カリキュラム・マネジメント

生徒・学校・地域の実態把握 → 教育目標

3つの側面

- ★ 教科横断的な視点
- ★ PDCAサイクルの確立 評価⇄改善
- ★ 人的・物的資源の活用

教育課程に基づき組織的・計画的に教育活動の向上を図る



兵庫県教育委員会

令和3年3月



カリキュラム・マネジメント (カリマネ) でめざすこと

1 カリキュラムは生徒の学びの総体

同じ授業をしても、生徒の学びは個々によって違う。
生徒個々の学びを教員が見取る重要性が増している。
学校文化や教室の雰囲気など隠れたカリキュラムからも生徒は学習している。

2 カリマネは負担が増える新しい取組ではない

今、行っている取組を焦点化し、質を高めていく。それがカリマネ。
焦点化により、意識的な指導を心がけることで、教員皆で生徒を伸ばしていく。
無から有は生まれぬ。今の取組をきちんと保存して、積み上げることが改善のコツ。

3 クルマの両輪としての授業改善とカリマネ

個々の授業の力量を高める授業研究だけでは、授業の質も生徒の学力も高まらない。組織としての力が結集されていないからである。
カリマネは、学校全体で組織的に取り組むことで授業の質を高め、最終的に生徒の学力を高めるもの。

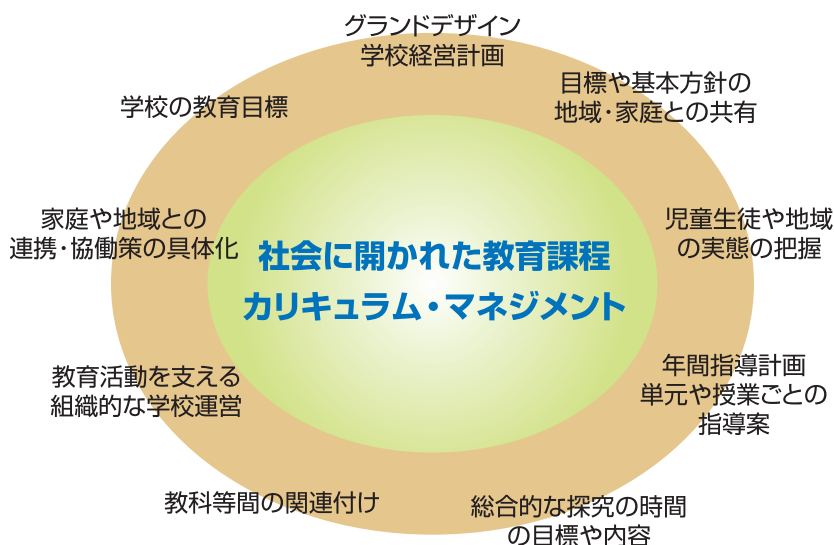
4 カリマネの一環としての指導と評価

教育課程にもとづいた組織的かつ計画的な指導のねらいに応じ、授業での生徒の伸びやつまづきを教員が適切に見取って、指導改善につなげるとともに、生徒自身が学びを振り返り、次の学習に生かせるようなサイクルをつくる。

5 学校評価の営みはカリマネそのもの

教育課程の編成、実施、改善が教育活動の中核である。
校務分掌にもとづき教員が適切に役割を分担するとともに、相互に連携・協働し、自校の特色を生かしたカリマネを行い、学校評価とカリマネとを関連づけることが重要。
それが、求められる資質・能力とは何かを社会と共有、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視し、地域や社会に信頼される学校づくりへつながる。

ひょうごのカリキュラム・マネジメント推進の取組



これからの高校教育

学校教育が協働的な学び合いの中で行われる特質を持つことに鑑み、学校教育ならではの学びを大事にしながら教育活動を進め、新学習指導要領のめざす学びを着実に実現することが求められている。「未来への道を切り拓く力」を育むカリキュラム・マネジメントにより、社会に開かれた教育課程の実現をめざしたい。

兵庫県教育委員会の取組

専門家に学ぶとともに、研究協議や各校の情報共有の場づくりを推進。また、独立行政法人教職員支援機構のカリキュラム・マネジメント指導者養成研修に現場の教員や指導主事を派遣。

H30 県立学校管理職（校長）研究協議会

倉見 昇一 氏 講演「カリキュラム・マネジメントと校長のリーダーシップ」

H30 県立学校管理職（教頭）研究協議会

村川 雅弘 氏 講演「新学習指導要領がめざす授業とカリキュラム・マネジメント」

H30 教務部長会

荒瀬 克己 氏 講演「何のためのカリキュラム・マネジメントか」



文部科学省指定 令和元年度～2年度

これからの時代に求められる資質・能力を育むための カリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究事業

兵庫県カリキュラム・マネジメント検討委員会

委員長	甲南女子大学	教授	村川 雅弘 氏
委員	奈良教育大学	教授	赤沢 早人 氏
委員	兵庫教育大学	助教	池田 匡史 氏
委員	県立夢野台高等学校	校長	北川真一郎 氏
委員	県立西宮高等学校	校長	萩原 健吉 氏
委員	県立教育研修所高校教育研修課	課長	神戸 剛 氏
委員	県立教育研修所情報教育研修課	課長	村本 由佳 氏



オンラインで開催した検討委員会の様子
ICT環境が整備され、オンラインで大学の先生方から指定校に指導いただくことが可能となり、コロナ禍における研究推進に大いに役立った。

指定校が作成したグラウンドデザイン

身につけさせたい資質・能力の育成に向けて、どのような教育活動を、どのような教育資源を活用し、どのように実施し、それらをどのように評価・改善していくのかをグラウンドデザイン(全体計画)として明らかにする。

姫路北高等学校

兵庫県立姫路北高等学校グラウンドデザイン

姫北デザイン

校訓: 自主協同・愛知創造

ビジョン: (1) 生徒に生きる自信や誇りを芽生えさせる学校 (2) 地域社会に貢献できる人材を育成できる学校

目指す生徒像: 「自主」自分で考え、判断し、行動(自分の考えを伝えることができる生徒) 「協同」他者と協力して事に臨むことができる生徒 「愛知」自ら学びに向かうことができる生徒(知ることやできることの喜び、楽しさ) 「創造」創意工夫ができる生徒

PTA ↔ 企業・地域 ↔

育成したい資質・能力: A. 学力 (進路を実現するために求められる学力), B. 協調性 (相手の立場になって、物事を考えられる力), C. 主体性 (自分のことは自分でやる), D. 社会性 (ルール、マナーを守る)

自尊感情・自己有用感

本校の教育場面における指導内容

①教科指導 【生徒の取組】 ・自分の考えを整理し、相手に伝える力を高めるため、作文や発表する ・「話し合い学習時間」を多く活用し、互いに教え合ったり質問を深める 【教員の取組】 ・AIを活用して、課題ではイメージしづらいことを動画や画像で示して生徒の理解を高める。 ・生徒同士で教え合う場面を設ける ・授業の進度プリントに取り組む時間、教え合いをできるようにワークの時間を必ず設ける ・生徒のしたいことよりも先回りしすぎない	②特別活動(HR・学校行事) 【生徒の活動】 ・オープンハイスクールにおいて案内や質疑応答の役割を担う ・学校行事として地域清掃を行う ・クラスで何かを決める時は、その行事の担当委員を中心に話し合いをする 【教員の取組】 ・移動教室の場合、移動先と時刻を伝え、遅れないように注意する ・文化祭に地域を招待する ・学校のキャパシティを大きくし何でも受け入れる ・取り組む「目的」や「メリット」を明確に示す ・予定や指示を丁寧に示さない	③部活動 【生徒の活動】 ・顧問の指示がなくても、自分たちで何をすべきか考える ・目標設定の状況、スケジュール管理を自分たちで考える ・活動時間を明確に示し、それに合わせて練習メニューを自分たちで考える 【教員の取組】 ・練習後のミーティングでは、相手の気持ちに立つことを意識させる ・生徒の自主性を最大限に尊重する ・終了後はミーティングで振り返り、課題を共有させる ・生徒のしたいことよりも先回りしすぎない	④その他 【教員の取組】 ・食堂、書下駄陣などのマナー指導の実施 ・生徒のしたいことよりも先回りしすぎない ・掃除、SHR館など教室にいる時間を減らす ・「なぜ?」「どうしたい?」「どうして欲しい?」じっくりと話を聞く(必ず解決に結びつけない) ・「どうしたい?どうやってやる?」を一緒に考える ・指摘する際は、ほめる点とセットで行う ・教員が意識して生徒に声をかける(あいさつ+何か一言) ・「待ち」を持つ(生徒の行動を促す)
--	--	--	---

北条高等学校

兵庫県立北条高等学校グラウンドデザイン(全体構想)

北高カリキュラム 2020

目指す生徒像: 甘えを捨てて厳しく自分を律し、仲間とともに自らを高め合いながら、心と体を鍛えていく生徒
自立して自らの志や夢の実現に努力し、未来を自分で切り拓いていく生徒
創造性やチャレンジ精神を持って、地域社会や国際社会に貢献しようとする生徒

育成を目指す資質・能力

知識・技能的側面	思考力・判断力・表現力的側面	学びに向かう力・人間性的側面
①基礎力 (「生きる力」の基礎となる知識・技能) ②発見力 (状況をよりよくするために、現状から課題を察知する力) ③試行力 (課題に対して、様々な手法を用いて試行錯誤する力) ④探究力 (物事に疑問や興味を持ち、知識・技能を用いて深く探究する力) ⑤発信力 (学びや探究の過程を取りまとめ、発信したり、発表したりする力) ⑥実践力 (その他の相手や状況等に応じて、知識・技能を用いて対応する力)	⑦統率力 (物事や行動について決定し、人をまとめ、他者と力を合わせてやり遂げる力) ⑧創造力 (獲得した知識・技能を元に必要なもの、新たなものを創り出す力) ⑨未来力 (未来の姿を想像して、自律して自己実現を図ろうとする活動していく力)	

主体的・対話的で深い学び (資質・能力の効果的な育成を図ります。また、手法についての研究や研修を通じ、教員のスキルアップを図ります。)

言語活動の充実 ~土台づくり~ (言語活動を充実させることで、教育の土台となる言語能力(読む力・書く力・聞く力・話す力)の育成を図ります。)

教育方針①: 頑張る人をあたたかく応援する
すべての教員がすべての生徒に関わり、一人ひとりを大切に
教育方針②: 地域貢献
地域に貢献し、地域に愛され信頼される学校

支援/貢献: 保護者・PTA、加西市、加西商工会議所
連携: 兵庫教育大学
学びの連続性: 加西市教育委員会・市内四中学校

尼崎稲園高等学校

チーム稲園 2020
兵庫県立尼崎稲園高等学校

教育目標

★あらゆる教育活動を通して、人間としての基礎の完成と調和のとれた人格の形成をめざす。
★自らの徳性を磨き、知性を高め、体力を練り、強固な意志と豊かな感性を培って自己実現を図る。
★地域に根差しつつ、広く社会の発展に貢献できる「世界のリーダー」となる生徒を育成する。

育てたい資質・能力

校訓: 克己自立 (自ら課題を発見し生涯にわたり学び続ける力)

校訓: 敬愛協同 (自己を肯定的に認め、多様な価値観を共有できる力)

校訓: 日新創造 (未知なるものに挑戦し自らの道を切り開く力)

世界のリーダー育成

1年次: 社会の一員として基本的なルールを尊重し、自己の役を自覚するとともに主体的に行動できる人間性を養う。
2年次: 自己の知性や特性を高めるとともに、さまざまな他人と協働できる人間性を養う。
3年次: 多様な価値観を認め合う中で、新たな価値を見出すとともに、社会や世界に貢献できる人間性を養う。

国語 (1) (4) (7) (9)	数学 (1) (3) (4) (7)	外国語 (1) (6) (7) (9)
理科 (3) (4) (7)	地歴・公民 (1) (4) (7)	保健体育 (1) (3) (5) (8)
芸術 (1) (7) (8) (9)	家庭 (2) (4) (6) (8)	情報 (1) (2) (6) (9)

定時制普通科単位制

兵庫県立姫路北高等学校

県下最大の定時制高校で、こころ豊かで自立する人を育てる普通科単位制の学校

基本DATA (令和3年3月現在)

- ◎設 立 昭和43年
- ◎校 訓 自主協同 愛知創造
- ◎校 長 中野 卓哉
- ◎生徒数 1年次94名 2年次104名 3年次96名 4年次99名



すべての場面がカリキュラム すべての教師でマネジメント



「どんな生徒に、どんな力を、どんな場面で、どんな方法で」を生徒・保護者・企業、そして全教員で探究

STEP 1

教員が考える「生徒に身につけて欲しい能力」に関するアンケート(自由記述)を実施

教員に「『生徒に〇〇のような能力を伸ばせば、もっとよくなるのに…』と考えて」と伝えることで「生徒にできて欲しいこと・できないこと」が明確化され、約100個の意見を4つの資質・能力(「学力」「主体性」「協調性」「社会性」)に分類し、各領域内で最も重視すべき意見を投票によって選出した。

STEP 2

生徒の学校環境適応感尺度(アセス)について調査

広島大学大学院教授の栗原慎二氏と同大学教授の井上弥氏の共同研究によるアンケート調査を実施。生徒の自尊感情や自己有用感が高いとは言えず、保護者や教員等の他者支援が不可欠であることがわかった。

STEP 3

生徒、保護者、企業に卒業までに身につけたい(つけてほしい)力について調査

教員が必要と考えた資質・能力について、生徒や保護者や企業がどのように感じているかを調査し、生徒、保護者の思い、企業の求める力を明確化した。

ポイント!



STEP 4

向上させたい資質・能力を焦点化し、授業研究を推進

「社会性」に焦点化し、校内研修を実施。授業中のケータイ使用問題について「暇な時間がある」ことが使用の最大理由であるというアンケート結果分析より授業改善が必要と考え、教科の垣根を越えた主体性を育むためのICTを活用した授業研究を実施。

実社会で役立つ資質・能力を示したグランドデザインの策定

姫路北高校のアンケートや校内研修の資料は、こちらのQRコードから



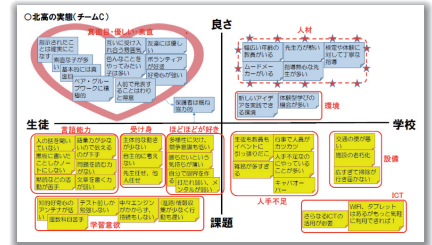
全日制普通科

兵庫県立北条高等学校

加西市で唯一の全日制普通科高校で、地域に愛され、信頼される学校

基本DATA (令和3年3月現在)

- ◎設立 大正12年
- ◎校訓 自律 協同 剛健
- ◎校長 西川 雅秀
- ◎生徒数 1学年120名 2学年112名 3学年155名



市内中学校と連携した「拡大カリマネ委員会」で、 子どもの学びの連続性を意識した教育を展開



カリマネを通して教員の共通理解を図り、従来の取組の改善や拡充により生徒の資質・能力の育成を図る

STEP 1

資質・能力の育成を図る教育への転換

教員全員で検討し育成する資質・能力を9つ設定し、グランドデザインとして見える化。
グランドデザインに基づき年間指導計画やシラバスを改善し、育成する資質・能力を明確化して、教員・生徒への意識づけを図る。



STEP 2

授業のPDCAサイクルを展開させるための準備

生徒授業評価アンケートの質問項目を見直し、授業評価ツールとして整備。生徒の資質・能力の育成を測るツールとしても活用。

STEP 3

加西市教育委員会・市内4中学校との連携強化

研究授業への相互参加、加西市教育委員会・各中学校教員を委員に加えた「拡大カリキュラムマネジメント委員会」を開催し、情報共有を推進して「子どもの学びの連続性」の確保に努める。

STEP 4

教員全員でワークショップを実施してグランドデザインを改訂

生徒や学校の「良さ」と「課題」を見出し、次年度の教育活動のあり方について検討。グランドデザインの改訂と取組の焦点化を図る。生徒の課題のひとつに挙げた「言語能力の不足」克服のため、「言語活動の充実」を重点取組に設定、令和2年度版グランドデザインに再整理し、教員間で共有。

中高で共有した育成すべき資質・能力に基づく指導計画の作成

北条高校のシラバス・年間指導計画や言語活動例の資料は、こちらのQRコードから



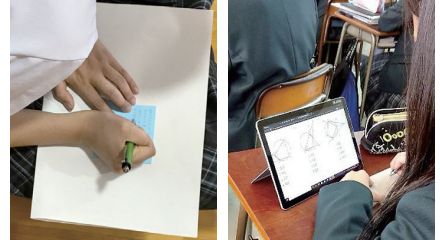
全日制普通科単位制

兵庫県立尼崎稲園高等学校

全日制普通科単位制で、柔軟な教育課程を編成し、進路希望を叶える学校

基本DATA（令和3年3月現在）

- ◎設 立 昭和53年
- ◎校 訓 克己自立 敬愛協同 日新創造
- ◎校 長 中村 稔
- ◎生徒数 1年次279名 2年次278名 3年次275名



世界のリーダー育成に向け、教育活動全体の改善に 「チーム稲園」で取り組んだカリキュラム・マネジメント



生徒の満足度、保護者の信頼度、地域の期待度を高める魅力ある学校づくりを推進

STEP 1

教科横断的な視点に立った本校の取組を全職員で共有

甲南女子大学村川教授を招き、現代的な諸課題への多面的な見方、考え方、すなわち「知の総合化」をキーワードに、カリキュラム・マネジメントについての職員研修や生徒向け講演会を実施。

STEP 2

グランドデザインの作成

期間限定でグランドデザイン作成委員会を発足、本校で育みたい「○○力」の案を作成し、職員全員にアンケート。その結果、9つの育みたい力を決定。各教科で、9つの力のうち、どの力を育めるかを検討。

STEP 3

「知の総合化」に向けた取組

総合的な探究の時間で、各教科学習、日常生活での気づきを付箋に書き込み、他教科とのつながりや身近な問題、また将来つきたい職業へのつながりを意識させ、項目ごとにノートに整理。日常の学習から、自らの気づきや社会とのつながりを意識することで、知的好奇心、学習意欲の向上につながるきっかけとなった。

ポイント!

STEP 4

「知の総合化」ノートの成果

「知の総合化」に関する生徒へのアンケートを実施。①情報の収集及び処理能力、②自己理解、③自主性、積極性、忍耐力、④課題を見つけ、処理し、解決する力、⑤今後のキャリアについての意識向上につながったかという問いに、肯定的回答が6割を占めた。「知の総合化ノート」の活用により、生徒が思考・アイデアを言語化し、次の学びにつながるサイクルをうみだしている。

教科横断的な視点に立った取組による「知の総合化」を推進

尼崎稲園高校の「知の総合化」の資料は、こちらのQRコードから





甲南女子大学
村川 雅弘 教授

カリキュラム・マネジメントを端的に述べると「生徒や学校、地域等の特性や実態に応じて、育成をめざす資質・能力の具体化・共有化、つまり目標のベクトルと、その実現のための方法（授業スタンダードや指導の在り方等）のベクトルを揃え、日々の実践を通してその見直し・改善を図ること」です。コロナ禍における「感染予防と学びの保障」に関して調査を行う機会を得たが、その過程で、特色ある3校のカリキュラム・マネジメント研究の成果が見て取れた。コロナ対応に対する全校的な取組に1年間の研究が活かされていると、手ごたえを感じることができた（拙書『withコロナ時代の新しい学校づくり』ぎょうせい、2020年）。

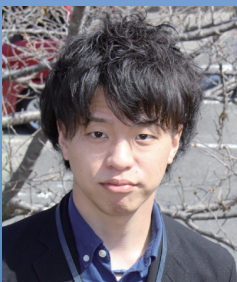
研究指定終了後においても、2年間の研究成果をさらに発展させ、着実に根付かせるとともに、県下の多様な高校のカリキュラム・マネジメントの実現に寄与されることを期待する。そのための支援は今後も惜しまない。



奈良教育大学
赤沢 早人 教授

高等学校におけるカリキュラム・マネジメントの実施は、学校の規模や文化などの関係から、理屈で言うほど容易いことではありません。そんな中でも指定校の3校は、各校のミッションを見据えて、在籍する生徒の教育上の課題に即応するようなカリキュラム・マネジメントを実施してこられました。

令和4年度の新学習指導要領実施に向け、今後、各高等学校では、教育課程の編成・準備作業が本格化することと思います。教科・科目の必修・選択の別を決めたり、単位数を割り当てたり、シラバスを作成したりすることももちろん重要ですが、これらが自己目的化しないようにしなければなりません。生徒の進路に向けての準備として、「教科を教える」ことはもちろん大切なことです。一方で、「教科で教える」こととは何かという問いも、引き続き持ち続けていただきたいと思います。このことを組織として継続的に考え続ける先に、カリキュラム・マネジメントと今言われているものがあります。



兵庫教育大学
池田 匡史 助教

カリキュラム・マネジメントに対して、各学校のグランドデザインの作成・共有や教科間の学習内容の関連づくりなど、先生方がチームとして工夫したり、努力したりすることのようなイメージを持たれているかもしれませんが、ただ、何よりも重要な側面は、「生徒が」学びのつながりを実感し、「生徒が」それを価値あるものとして意味づけることが不可欠である、という面です。先生方が教科等横断的な取組をしたつもりでも、生徒たちが分断して捉えてしまっているならば、せっかくの取組も効果的なものとはならないのです。このように書くと、大変なことも思いますが、一方でそれは、先生方の工夫や努力、その意図を生徒たちが理解してくれるという、教師冥利に尽きることもかもしれません。

「チームとしてカリキュラム・マネジメントに取り組む」という際には、生徒たちもそのチームの一員にいることを意識してもらいたいと願っています。